現代中国の若者像――ネット世代「80後」と「90後」の希望と苦悩

彭　　佳紅
帝塚山学院大学　人間科学部　教授

1. ネット人口と「秒殺」

「80」は中国語で「バーリン」と発音します。「90」は「ジョウリン」といいます。この「ホウ」というのは、「後」という漢字を当て日本語と同じ意味です。つまり1980年以降、1990年以降生まれた人のことを指します。80年以降生まれた人、今でいうと30歳、31歳から40前までの人たち、30代中心と考えていただいて結構です。それから「ジョウリンホウ」というのは19歳、20歳から29歳ぐらいまでの年齢層のひとをいうのです。といっても、19歳と29歳は、10年の差もありますので、それはあくまで一つの傾向を見るための目安として、ご理解いただければと思います。

この世代は、つまり19歳から40前までの世代の持っている一つ共通点は、ネット利用者ということです。彼らはインターネットをよく使います。ですから、「ネット世代」とも言われています。この「ネット世代」は、実生活の中でどういうような側面があるのか。あるいは、あまり日本の新聞やニュースに出てこないようなことを選んで、生活者の視点から、きょうのお話をしていこうと思います。

まず、最初のページにある手書きの①、②としるしてあるところをご覧ください。「あれ、なんだ」と不思議にお思いになるでしょう。実は、これは時事中国語のテキストの1ページです。語学を勉強するために、新聞、ニュースを持ってきてテキストにするんです。その時事中国語のニュースのタイトルに、「秒杀」というキーワードがありますね。私がおはなしをしたいのは、この「秒杀」です。「杀」は、現代中国語の略字で「殺」という文字です。右半分が省略されている形です。この秒殺という言葉は、大陸を風靡しているとのことです。下にある日本語の訳も一緒にご覧ください。今、中国の若者の間で流行りのこの「秒殺」とは何だろうと不思議に思っていらっしゃるでしょう。今、中国の若者の間でネットショッピングがはやっています。高級デパートへ行く若者はあまりいません。そのかわりにネットで買い物をするのが日常茶飯事。今のネット人口は、日進月歩に増加しています。去年（2009）の報道では3億人とか4億人とかいわれています。今後どんどん増えるでしょう。13億人中3億から4億人とは、赤ちゃんやかなりの高齢者、そして山奥など通信不能の地域を除いた、3億から4億人です。そのほとんどが青年と中年です。

中国のバーリンホウ（80後）・ジョウリンホウ（90後）の人たちは、主な買い物はネットでやっています。そして、ネットオークションなども。皆様がオークションと聞いたら何かすごく立派なものとか、高級品とかを思われるでしょうが、そういうイメージとは違います。本当に日常的なちょっとしたものをオークションしちゃうんです。私もこの近辺地域に住んでいるので、毎週狭山などの地域新聞が配布されています。この地域新聞に例えば使わなくなった乳母車などを安くあるいは無料で提供するとかの欄がありますよね。そういう感覚で、まだきれいな子ども服や家具類、小物などを気楽にネットオークションにアップします。そうすると、欲しいと思う人は手を上げて買ってくれたりします。

「秒殺」とは、殺人の意味ではありません。ネットで買い物するときに、マウス、生きたネズミではありません（笑）、コンピューターを操作するあのマウスで、ピッとクリックすることはだいたい1秒ぐらいです。この1秒の何分の1という僅差で、ほんとうにまばたくその一瞬に、自分が欲しいものをゲットできるかどうか、かなりの緊張感を伴う行為です。皆様、ちょっと想像してみてください。もしあなたがいいと思うものは、ほかのたくさんの人もほしいと思うかもしれませんね。いいものが安く売っているネット情報をいかに早くキャッチしたうえで、顔の見えないネット世界にいる誰よりも早く、正しく購入の決断をする。それが真剣勝負ですね。決断したら、すぐピッとクリックする。早押し競争のようなものです。これが「秒殺」です。つまりネットショッピング最先端の代名詞となっています。いいものをネットで安く買える行為を、マウスのクリックのスピードで形容しているわけです。

その言葉が流行りだされたもう一つの要素は、「殺」ということばにあります。もとはパソコンゲームから出てきた言葉です。戦いのゲームで相手を抹殺するときに、一瞬で殺しちゃうことを秒殺というのです。それが一瞬にして自分の欲しい商品をネットで「ゲット」するということに転用されたのです。ゲーム感覚でネットショッピングを競い合うリアルさがこの言葉によく出ています。ゲームも大好きなネット人口とともに普及したわけです。

この言葉は今大陸中国でどれぐらいはやっているかといいますと、友達や友人の間にこんな挨拶ことばが交わされています。「昨晩も秒殺した？」「したわよ。かわいいものをゲットしたの」という感じ。秒殺成功したとき、買い手にとって「やったぁ！」とさけびたくなるぐらい、一種の興奮、達成感に似たものが体験できるらしい。その感覚はわからないことでもありません。例えば、お母様方がTVショッピングで、人気商品を間に合って手に入れたときの快感とそっくりです。

一つの言葉からいまの中国若者のライフスタイルを窺えます。この「秒殺」という流行語から、夜遅くまでパソコンの前で目を光らせながらゲーム感覚でショッピングを楽しむ若者の表情が、容易に想像できますね。

2.「70 後」「80 後」「90 後」の特徴の比較

プリントの 2 枚目をご覧ください。

ネット世代という話をしますので、できるだけ主な情報をネットからピックアップしてきています。これはある個人のブログからのものです。結構おもしろくて少し風刺漫画的な、そのパロディーが楽しいです。この文の日本語訳のページも見つかったので、皆様に紹介しながら説明します。70、80、90 というのは、先ほどご説明した通り、つまり「70 後」、「80 後」、「90 後」の意味です。そこで、それぞれの世代の特徴というか傾向というものを、ちょっとパロディーにして面白おかしく比較しています。

例えば、70 年代に生まれた人は「仕事バカ」といいます。仕事熱心で人生、仕事一筋という感じです。ところが、80 年代に生まれた人は「残業拒否」と。つまり自分の生活、ライフスタイルを優先し残業は遠慮なく断るという意味です。今度は、もっと若い、今の大学生のような 90 年代に生まれた人は、「出勤拒否」だと、風刺が効いていますね。つまり「拒否」というよりも、自分のことを最優先に考え、職場の都合よりも私の都合というニューアンスです。

それから、「**住**」のスタイルから見てみます。働き者の「70 後」は、堅実に都心部からやや離れた郊外に家を買い、毎朝 1 時間以上かけて車や電車で通勤。日本のサラリーマンのようです。それに対して、「80 後」は、朝はすこしでも長く寝たいから、部屋は賃貸で会社近くの物件を選び、自転車か徒歩で通勤できるようにします。彼らは自分の個性やライフスタイルを大事にしたいから、何か資産を持つよりも、まだ若いので、より良い仕事を求めて、いつでも転職、転居できるように、会社の近くに部屋を借り、自転車か徒歩で行けるような距離に住むことを選択します。さらに若い「90 後」は、住むところはどこでもいいと。好きな彼氏がいる場所ならどこでも結構だと、いかにも「青春真っ只中」という感じですね。（笑）

次に「**休暇**」の過し方から見ますと、「70 後」は、連休などすこし長い休みがあればよく旅行に出ます。彼らは「観光スポットでピース写真」。写真を撮れば必ずピース。（笑）ところが、「80 後」は、連休は家で寝ているか、友達とカラオケに行くか。たまに「旅行先で撮った写真は風景だけ」という、よっぽど人間に疲れてしまったのでしょうか。「90 後」は、「毎日が休日だ」と。またやられましたね。（笑）　つまり、仕事が第一と考えていないので、年代的に最も若い。今年から中国ではゴールデンウイークがちょっと短くなったんですが、そんなもの関係ないみたいな感じで、「わが道を行く」のです。

食べ物や飲み物の「**嗜好**」でいいますと、「70 後」は、赤ワインが好きで、「長城ワイン」だと。「長城」とは北京でつくられたワインの銘柄です。飲み口がさわやか、甘さ控えめのテイストワインです。つまり中国のブランドワインを好んで飲んでいるとのこと。「80 後」は、お酒はふだんほとんど飲まない、飲んでもビールぐらい。「90 後」は、「韓国のジュース」、韓国の果物のジュースが中国でとても人気があります。それから「日本の炭酸飲料」です。つまり、中国のものよりも外国のものをおしゃれ感覚で、新しいものへの挑戦に躊躇しない世代です。

つぎは、「**人間関係**」について見ると、「70後」は、いかなるときでも上司がそばに立てば直ちに席を譲る、上下関係をつよく意識します。「80後」は、上も下もありません、みんな平等という感じ。このようないわゆる「平等」に対してけっこう違和感を持つ方々もたぶんいらっしゃるかと思いますが、それが「80後」の特徴です。「90後」は、「天下、唯我独尊」。もちろん全員が全員そうではありません。一つの傾向として見ていただければと思います。

次は「**金銭感覚**」について、オモシロイと思い選びました。「70後」は、「貯金・貯蓄がある」と。やはりしっかり働いていて、自分はこれからどうするか、ちゃんと計画して実現に向けて努力する堅実派です。「80後」は、物に対してあまりこだわりがない。仕事に対して自分が好きなことをするから、場合によっては「借金がある」というケースもあります。「90後」は、まだ20代前半で、経済的にも「頼れるパパがいる」というんです。そこがちょっとおもしろいです。つまり二十歳前後の若者の父親はまだ40代でしょう。40半ばから50前半が一般的です。この世代は今の中国で一番豊かになっています。そして「90後」は、ほとんどが「独生子」(一人っ子)です。まだ親のすねをかじっている様子がよく描かれています。

さらに、「**週末**」の過し方については、「70後」は、やっぱり週末にも仕事。顧客と会食などよく仕事が入っています。「80後」は、週末には「同級生とサッカー」。週末はプライベットライフを楽しむ。仕事を入れない。割り切ってやっています。「90後」は、まだまだ学生の身なのか、まだ就職していないこともあるので、きみたちは「毎日週末」だよねと、おどけて笑わせます。

「70後」とは、先ほど説明しましたとおり、主に40代ですね。41歳から49歳ぐらいまでの働き盛りです。当然といえば当然ですが、その世代は職も持ち家も持つ、いまは社会的な責任も負う世代です。「80後」は、中国の改革開放政策以降は、社会環境がガラリと変わりましたので、豊かさもドンドンアップしてきているときに生まれた世代。「90後」は、豊かは当たり前。つまり苦労や、貧乏の時代を知らない世代です。かれらは生まれたときにすでに豊かになっているからです。お母さん、お父さんが何でもやってくれますし、ほとんど一人っ子。いろんな外国から輸入されたもの、日常的な飲み物から日本や韓国の製品は、普通に身の回りにある。スーパーで普通に売っていますから。日本の若者とほとんど変わりません。今の中国では、伝統的な考え方の中国人がいて、40、50代ですね。30代の人は両方の気持ちがわかっていますが、政治に関心があって自由を求めます。20代の人は政治のことに余り関心がない感じで、自分の人生の楽しみ方を追求するというような傾向が見られます。

次のページをご覧下さい。左側は、今中国で最も尊敬されているフリーターのことが書かれています。日本でフリーターは余りいいイメージをもってないようですが、実は本物のフリーターになるにはかなりの才能と自信がないとなれません。日本でニートという問題がありますので、フリーターはイメージダウンされてしまいました。本当は組織に束縛されずに才能を発揮するタイプのことで、だれでもできる仕事ではありません。

中国でたいへん活躍している日本の青年がいます。多分皆さまもテレビかネットでこの名前を

見たことがあるかと思います。日本でまだそんなに有名ではありません。加藤嘉一さんという名の若者です。84年生まれのことしで27歳。まさに日本のバーリンホウ（「80後」）ですね。この青年が19歳に北京大学に留学し、そこで学位も取りました。大学卒業後、研究員として教育現場の教壇にも立ち、テレビのコメンテーター、雑誌コラムニストなど、中国語で書いた書籍も中国で出版されています。皆様がもしも興味がありましたら、「加藤嘉一」というキーワードをパソコンで検索すれば、たくさん関係情報が見られます。

この加藤さんは、たいへんな活動家です。彼の書いている本の内容やネットでの発言などに興味があって調べてみました。それで分かったことは、彼は実にバランスの難しい立場に立っていますが、彼は若者らしく、何ものにもとらわれないように、果敢に発言しています。つまり日本のメディアにも左右されず、中国のメディアにもできるだけ左右されず、自分の論点を堂々と語っています。

もちろん彼の論点に関してはいろんな意見があり賛否両論ですが。これはまたバーリンホウという現象は、中国だけのものではないようですね。先ほどの話のとおり、バーリンホウの若者は、社会につよく関心を持ち、政治に興味があるという共通な傾向があります。自分がこの国をよくしていく、あるいは世界をよくしていく責任があると、どこか真剣に考えている世代です。その意味で、同じ「80後」の加藤さんは、この活躍ぶりと、このエネルギッシュな行動力、間違いなく中国のバーリンホウに共通するものがありました。加藤さんは今も北京在住で、時々日本に帰ってきては、マスコミで発言したりしています。

お手元の文章をご覧になればお分かりのように、彼の中国に対する見方は、今の日本で報道された中国の印象とはかなり違い、かけ離れたものがあります。これは彼が自分の体験に基づいてできた見解です。しかし、日本で彼への攻撃もありました。中国に言わされたのではないかとか、すぐそういうことをいう方がいます。けれども私が見た限りでは、彼はかなり自主性を持って伝えようとしています。もちろん社会に生きていますので、全くどこも左右されないということはあり得ません。しかし、彼は一匹狼という感じで頑張っています。その証拠に、多くの中国の若者に尊敬されています。

3.「蟻族」と呼ばれた就職難の大卒者

プリントの右にあるもう一つのキーワード、「蟻族」。この「ありぞく」はいまの中国ではやっていることばです。最近日本にも翻訳が出ました。二年前、私が上海で原書を買ってきました。その時に中国でこの本に基づいて作成されたテレビ連続ドラマをやっていました。それで、そのDVDも買って帰ったんですが、延々と長いです。中国の連続ドラマは見るのにちょっと根性がいります。六十何時間もかかりますので、見終わるときにはもうくたくたでした。蟻族とは、大卒だが就職難に遭い、地方出身の元大学生らが安いアパートにアリのように群居し、就職活動を続けている集団のことをいいます。つまり就職難でまだ就職活動をしている貧乏学生たちが集まっ

て、都会の中で一番安いアパートを借りて、1部屋に6人、8人、2段ベッドで住んでいます。学生時代は地方から大学に進学し、中国の大学は宿舎を備えています。しかし大学を卒業したその日から、宿舎に住めなくなります。就職したら、またその社宅に住めます。就職が決まらなければ、都会の家賃はたいへんな負担になります。まだ就職活動をしている最中に卒業してしまったんですね。住む場所がないと困るので、自分の微々たる生活費で、集団で一緒に住めばということからはじまったことです。この様子を後ほどの映像からも見ることができます。2段ベッドで、ベッドの中でパソコンを使って就職先を探しているということです。

ほとんどの蟻族は地方からの学生です。田舎から出てきて故郷に錦を飾るという感覚は日本と一緒ですね。親は農民で、彼は例えば何々村の秀才だったという、本当にへんぴな村から出てきた学生もすくなくありません。例えばITを勉強して、簡単には自分の村にそのまま手ぶらで帰れないというような状況もあります。しかし、自分の希望する企業にはなかなか入れません。その大卒者たちはインテリです。決して単純労働で満足するものではありません。狙った会社に入れない。しかし自分の夢は簡単に捨てられないというような大変なジレンマの中にいるわけです。古いアパートがだんだん、都会でも古いものを壊していくような今の発展の流れに遭い、次の月にはこの建物は壊しますから、もう出ていきなさいと言われれば、また次の寝所を探さなければいけないです。そういう群居族が就職難によってどんどん膨れ上がっています。アリのように一生懸命職探をして、場合によってはバイトをやりながら、生活費を稼いでいます。大学を卒業したので、親にはこれ以上仕送りしてもらえません。親が借金して大学を卒業させたケースもありますので、就職して親孝行をしないといけない、と青年たちは心のなかで焦りながら、でも明日を信じようと奔走しています。

この蟻族が、いま、中国で一つの社会問題として政府も非常に頭を悩ましています。つまり、いろんな反日デモなどの参加者は、ほとんどこのタイプといわれています。もともとつよい不満があり、生活保障がなく、インターネットが上手に扱える若者です。かれらはデモなどをネットで呼びかけたりしますので、中国政府はそれを危険要素と見ているようです。つまり、社会問題とされているのは、今のバーリンホウ・ジョウリンホウが多いです。30歳になっても、まだ自分が入りたいところに入れない、しかも単純労働もしたくありません。日本では大学進学率が高く、日本で大学生はえらいという考えはほとんどありません。ところが、中国では、特に地方によってはそうではなくて、大学生は非常に貴重な存在でインテリです。だから、プライドが高いです。そういう意味では、4年間も、専門によっては6年間も勉強して、何で私がまた皿洗いに行かないといけないんだというところがあります。

社会が彼らをちゃんと受け入れるような受け皿が用意できていないので、蟻族という層ができたのです。蟻族のことを意識し研究し、本まで出したその著者も、またその研究者も実は同じ世代の80年代に生まれた若者たちです。これが一つの社会現象になっています。TVドラマとしても描かれ、たいへんな話題になったのです。

私は授業中、中国の学生の就職活動の映像を大学の学生たちに見せました。中国の大学生が就職活動で何回ダメ出しをされても、笑顔で次の企業に向かおうとする姿勢に、学生たちは見て吃驚しました。何でこんなに明るく、こんなに強いのかと不思議に思ったとレポートに書いています。それは育てられた環境とハングリー精神が違うのです。それに退路がないということもその一因です。

今も就職難の問題が依然としてあります。どうやって早く解決するか。中国政府はまだ抜本的な政策を見出していません。しかし、蟻族は年々ふえています。生活不安定というのは社会にとっては非常に危険な要素です。もちろん中国政府はそれについて十分わかっていると思います。

4. 中国の若者とネット利用

次のページは、日本のある会社の調査データです。主に北京、上海、広州などの大都市、沿岸都市に関する調査をしたものです。このデータから今日のテーマである中国の若者の生活について見ていこうと考えております。

まず見ていただくのは、中国のメディア接触に関する調査の結果です。普段接触するメディア、インターネット、パソコン利用などはどのような現状なのか。それから、例えば政治関連情報とか、あるいは経済関連情報、生活関連情報については、どこから入手したかということを見ると、やはりインターネット、パソコン利用率が高く、69.4%という数字が出ています。もちろんこれは大都会の北京、上海、広州を対象にしたものです。この情報は比較的新しく、ことしの3月のものです。この会社は毎年データを出しています。20代から40代までの男女、インターネットユーザーに関するメディアの接触あるいはインターネットの使用に関する意識を調査するために、このようなものを出しています。中国の都市部では、一般家庭のネット、パソコン使用率が70%近く、場合によっては70%を超える数字もあります。その次はテレビです。テレビは大体11%、12%というようなパーセンテージが出ています。もう一つは、携帯専用ネットという、携帯でネットを見るというものです。まだちょっと少なく、3.1%となっています。

ネット・パソコンの利用率について、都市や地域によって違います。例えば地域別で見ると、香港の隣にある広州は、ネット・パソコンの利用率は81.7%という数字が出ています。比較的高いです。上海は69.2%と、香港に比べて少し低め。これは去年の調査結果です。テレビ、有料新聞によって大体の政治関連ニュースを手に入れることが一番多いです。その次はラジオ、ラジオと携帯ネットです。

それから、携帯電話、デジタルカメラなどのデジタル製品の情報をどこから入手したかです。やはりネットです。ネットでデジタル製品の情報を入手して、そのまま買ったりするんです。特に若い世代、つまり40代までの世代が、ネットで買い物するのが日常的な習慣になっています。これは都会部です。きょうは農村部を扱いません。

オンラインショッピングの利用頻度については、一般的には2週間から3週間に1回ぐらいと

いうことになっています。1回といっても1点だけ買うとは限りません。1回で四、五点買う、10点買う場合もあります。

中国の若者は例えば映画の情報や音楽の情報をよくネットで見ています。その点で、著作権の問題も時々起こりますけれども、最近、海賊版などの不正なアクセスをかなり厳しく取り締まっていますが、まだまだ穴場があります。

ことしの私のゼミには、中国の若者のネットの使用状況を卒業論文として書こうと今一生懸命調べている学生がいます。例えばヤフーCHINA、あるいはバイドゥ（百度）という中国大手のサイトです。このバイドゥの日本のサイトもあります。著作権の問題で日本の業者に訴えられたこともありました。たくさん利用される割にちょっと緩い部分もまだ現実にはあります。ニーズに対して危機管理がまだ間に合っていないというのが現状です。だんだん整備されていくことが今後の課題です。

日本のネットショッピングと違うところは、日本では服や時計など日常用品を買うのが一般的ですが、いまの中国では、このあいだ上海で番組を見てびっくりしました。新車をネットで売っています。30分で何百台も売れました。試乗もせずに車を買っちゃうですね。それだけ人気のある車でしょうが、ネットで車が売れていること自体は、消費の異常なぐらいの熱が今の中国にあると言えます。

先ほどお話ししたバーリンホウ・ジョウリンホウの若者は新しい世代で、彼らには新しい価値観を持っています。今までの世代と違う生き方をしているということです。このデータからも、80後、90後の若者たちのライフスタイルを見ることができます。特にジョウリンホウ（90後）は、まだ親からの金銭的な援助が、学費も含めまして、35.9%で最も高いと言われています。その次は、もちろん食べないといけませんので、食費です。食費は35.2%です。次は家賃です。家賃はできるだけ安いところに住むのが学生たちの現状、28.3%です。80後と比べて90後は、食欲旺盛な若者で食費が48.9%と高くかかっているということです。

そして、自分でアルバイトなど仕事をしている人もいますので、稼いだお金の使い道はどうなっているかといいますと、まず生活に必要なものに使うのが26.7%、一番多いです。それからショッピングに使うのが、26.7%、生活必需品です。自分の好きな服などを買うのは24.1%、貯金は23%という順番になっています。一番若い層の17から21歳までの若者たちは、趣味のために使うのが21%とあります。ほかの年齢層より高くなっています。彼らの生活必需品は20%、やや低め。それはどういうことかといいますと、ジョウリンホウは、趣味、生活必需品は最低限でいいから、お金を節約して、自分の好きなことをやる。これがこの世代の特徴であるがと考えられます。

例えば余暇の過ごし方。80後は休みの日にインターネットで遊ぶというのが34.8%、家族との団らんが24.1%、つまり4人中1人。恋人や友人と会話をするのが15.7%です。それに対して一番若い層のジョウリンホウは、休日のインターネットは45.6%、半数ぐらいの人が休みの日には

家でパチパチやっていることになります。若い人ほど多くの時間をネット利用に費やしていて、家族団らんの時間が減っているという傾向が見られます。

5. 中国若者の恋愛事情と「裸婚」ブーム

次のテーマは、若者の恋愛です。恋愛、結婚はいうまでもない人生の大きなテーマです。

6ページにテレビ画面の写真が出ていますけれども、これはドラマのワンシーンです。今月、中国でのホットな話題です。「裸婚時代」というドラマが中国で話題になっています。中国各地でオンエアされていて、非常に高い視聴率を得ています。これも一つのキーワード。「裸」に「婚」と書いて、スッポンポンの結婚という意味ではありません。(笑)

今まで結婚というと人生の一大事。できるだけ豪華にするのが中国の一般的な慣習と言えましょう。しかし最近、流行っているのは、その逆です。つまりマイホームも持たない、マイカーもない、貯金もないという「三無主義」です。三無の若者、とくに30代の若者がふえているとのことです。

中国の国民は全体的に豊かになっているにもかかわらず、ご存じのとおり、不動産がすごく上昇しています。若者にとってマイホームを手に入れることは至難のわざになりました。私の実体験で恐縮ですが、今から約15年に、上海で自分のマンションを買いました。マンション販売が始めたばかりのときでした。まあまあいい環境での3LDKで、日本円で約600万円ぐらいでした。日本の友人はみんな安いといいますが、しかし当時就職した何年目か、子どもも小さかった私にとってはそんなに安い買い物ではありませんでした。しかしそのあと、二年も経たない内に同じような物件は、倍に値上がり、今となっては4倍の価格になりました。びっくりするぐらいのスピードで値上りました。私は自分が住むために買ったので、どんなに上がっても関係ありません。もしあの時期に投資のために10軒も20軒も買っていたら、いまは金持ちになっていることも容易に想像できます。それが不動産バブルの一縮図です。

そのような不動産の上昇によって、就職した若者は家が持てなくなったのです。日本では5年勤めたら何とか家が持てるといいますね。今、日本で新築を買うのに頭金のない物件もたくさんあります。実は中国にもそのような目標があったんですが、不動産バブルによって若者、30歳以上になってもなかなか家が持てない状況は改善されていません。かなり立派な会社に勤めていても、頭金だけでもなかなか払えません。住宅の単価がものすごく上がっていますので、不思議なぐらいに、だれが住むのかというぐらいの値段まで上がっています。中古の物件も便乗値上げしています。そろそろ結婚しないといけない年齢になっていても、家が手に入りません。

大陸中国は男尊女卑の社会ではありません。私の母の世代から女性は普通に勤めています。専業主婦はほとんどいません。ところが、結婚となると、意外と伝統的な考えが根強く残っています。家は大体男性が用意するものだと、多くの女性はいまだに思っています。花嫁道具は女性がいっぱい持っていきますけれども、家は男性が用意するものと一般的に思われています。もちろ

ん一緒に出資して買うケースも最近増えていますが。それでも男性は大変です。親の援助がないとなかなか家を購入することができません。

住宅問題をはじめとする若者の生活苦を描く連続ドラマはたいへんな人気を得ています。貯金がない。マイホームがない。もちろんマイカーもないという人たちも結婚しなければなりません。そういう社会背景のもとで若者同士が恋愛し、愛さえあればとドラマがつくられたのです。裸婚時代と名づけ、何も持たなくても愛さえあれば結婚するんだと、一見純愛ドラマのようですけれども、若い世代の苦悩がリアルにドラマ化されているといわざるを得ません。格差問題の提起です。そういうことから見ても、今の中国のかじ取りは大変むずかしいです。

若者の結婚に関するもう一つ調査データをご覧下さい。物欲に流されながらも若者の未婚者の6割以上は愛情を信じているという調査結果が出ています。これはいいことだと思います。愛を感じないと結婚しないという若者は、6割以上いるということに、希望を感じます。

結婚の仲介について、いまはいろんな友達づくりや結婚仲介のサイトも出ています。ひとつの傾向としては、たとえばプロポーズに対する男女の積極性に関して言えば、これは私が中国を出た三十年前とさほど変っていません。それが中国の文化や習慣に関係する事柄ではないかと思われます。結婚するまでは、男性が非常に積極的で、女性は比較的に受け身的です。結婚したら逆です。（笑）　どういうことかといいますと、例えば求婚について女性からするのがあまり好まれません。格好悪いと、中国では今でもそう思う女性が多いようです。その点で見ると、日本の若い女性がかなり積極的で、自分の感情に忠実です。一般的に中国文化の、儒教的な発想がまだ根強くあるからかもしれません。形式としては、プロポーズは男性からするものだと、望む女性が多いです。特に農村部に行けば行くほど、その傾向が顕著にあらわれています。

そして、今の中国は男女の比率は男性のほうが多いという計算になっています。もう何年も続いていました。男性が多いから、女性がもてるのではと思われるでしょう。男性はかなり積極的にならないと結婚は難しいという問題が出ています。このリストによると、ハルピン、アモイ、石家荘（北京の近く）の若者は、「男性が恋愛に対する自信がある」という項目の全国トップスリーになっています。

そのような独身男女の恋愛事情も、現代中国文化のひとつ表れですので、面白いですね。例えば中国に留学して、現地で若い中国人と恋愛している日本の若者も結構いると聞いています。生まれも育ちも違うのにどこが魅力なのかと聞いたら、積極的であるとの答えが返ってきます。中国の男性が積極的で、レディーファーストのところもいいといわれています。なるほど。これは欧米文化の影響もあるでしょうが、基本はやはり現代中国文化に由来する積極性です。積極性があるからすべていいというわけではありませんが、いまの中国文化の一面を表しています。

6.「租客」と環境問題

次のキーワードは、いま、中国で流行っている「租客」ということばです。日本語で解説しま

すと、客とは、何々族の意味です。中国でタクシーのことを「出租車」と書きます。つまり、貸し出す車という意味です。租とは、レンタル、借りるという意味です。よって、「租客」とは、レンタル族です。

今、中国でこの言葉が流行っている背景を見てみたいと思います。一つは、環境資源を節約しようとする動きがあります。しかし、それだけではありません。そこに経済的な背景があります。プリントの左の後ろから2段目のところをご覧になっていただきますと、例えば北京のような大都会では、住宅の価格が先ほどおはなしをしたように高騰して、車の保有のコストもふえているといいます。月収5,000元以上のサラリーマンは、お金を簡単に日本円に換算しないほうがいいと考えます。物価が違いますので、貨幣は現地での価値を考えないと意味がありません。単純にレートで計算するとかえって誤解を招きますので。5,000人民元というと、現地では約日本の25万ぐらいの価値があるかなという感じです。初任給のようなものではありません。4、5年間勤めた28～30前ぐらいの、普通のサラリーマンの給料というふうに考えてかまいません。もちろん業種によってたとえば技術者だったら1万以上、外資系のなら2万元以上などもあります。月給2万元ぐらいになると、かなり高給取りになります。普通のサラリーマンの4倍ですから。例えばドイツと中国の合弁会社とか、日本の大手とか、あるいはプログラムをつくれるような特別な技能を持っている者の収入は高くなります。つまり若い人のあいだでも、技能によって給料の差がかなり出ます。普通のサラリーマンの給料なら、家を買うための頭金を用意するのも、家族の援助がないとなかなかできないという現状です。それでレンタルという発想がうまれたのです。レンタルは、本来一般的に中国人にはあまりなじみのないものでした。これは最近の文化です。

現実的に考えると、一般乗用車のレンタル費用は1日200元、日本円なら約3,000円。これは単純レートの計算した数字です。しかし、中国での価値は約1万円の実際の価値があります。例えばベンツのような高級車種を借りても1時間38元。すごく安いわけです。38元は300円ぐらい。日本円で考えると安すぎておかしくなります。それに、メンテナンスは全部向こう持ちですから、1週間借りても1,000元ぐらいです。そういうことで考えると、車を借りたほうが、例えば家族旅行だって高級車に乗れますし、後のメンテナンスは自分でしなくていいです。自分で例えばボロ車を持っていても、年間2,000元以上のメンテナンスの費用が要ります。

というような現実的な問題が、今の中国にあります。それで今後の5年は、レンタカー市場は多分25%から30%ぐらいまで広がるだろうという予測が出ています。実は日本のレンタカー市場も広がっていると日経新聞で読んで知りました。自分で所有するよりも、例えば奥様がちょっと買い物するために使うとか、あるいは数人で1台を共同で使うとか、最近そういうニュースがありましたね。中国では現実的に市場と経費の問題が、もっとリアルな問題として理解されていて、レンタルに対する人気がドンドン高まっています。

レンタルといえば、車だけではありません。例えばドレス、あるいは貴金属、真珠ネックレスなど高価なものを持つと大変ですけれども、結婚式などのときだけ使うので、1日だけレンタル

すればいいと。日本でこの頃、卒業式の着物レンタルはよく利用されています。そういう感覚です。そして、レンタルを上手に使っている中国の若者がふえています。レンタルですから、毎回違うものを借りることができますので、いっそう豊かな気分になるといいます。特に90後は、とにかくいまの生活を楽しみたい。所有欲はあまりなく、多様性を求めています。今後のレンタル文化を支えるのはこのような世代だと、中国のレンタル産業が予測しています。

次は、住宅の内装についてお話しします。不思議と思うでしょうけれども、中国で家を買う場合、売り出されている物件はほとんどコンクリートの箱なんです。コンクリートの箱を買って、その内装をどうするのと。内装は全部自分でするのです。例えば浴室のタイルはどんな色やデザインにするのか。ドアはどんな材料にするのか。カタログを取り寄せて自分の好みで決めて、業者に作ってもらうのが一般的です。甲子園よりも広い場所に建材の店がズラリと軒を連ねています。自分が好みの建材を選んで、契約を結んだ内装工事の担当者に仕事をしてもらいます。というわけで、同じマンションでも、ドアをあけたら全然違う部屋になっています。中国ではこれが普通です。内装は大変ですが、自分好みの部屋がつくれるわけです。ですから、家を買ったからといって終わったわけではありません。これからはじまるというのです。

それから、近年の中国都市部の結婚について。大体このごろホテルやレストラン、貸し切り洋館で結婚式を挙げます。そのうち結婚式をホテルで挙げるのは約70%の数字が出ています。ホテルで結婚式を挙げた後、何もせずバイバイだけでいいですからね。昔、家で料理など何から何まで自分でつくって、家族親族総出で共同作業をやっていました。しかし、いまのような多忙な都市生活ではそんなことはできなくなりました。それと関連した伝統行事として、大晦日の過し方も変わりました。新年とは、中国で元旦もそうですが、本格な新年というのは、旧暦の春節のことです。元旦は1日しか休みがありません。旧暦のお正月は約1週間の休みがとれます。30年数前までは、都会でも家でいっぱいごちそうをつくっておいて、日本のお節料理のようにいっぱいつくって、各家庭のお母さんの味で親族や友人をもてなすのが一般的でした。しかし、この三十年のあいだ、核家族が増え続けたことでお母さんの味を継承してくれる若い夫婦が少なくなりました。そのうえ、多忙で生活リズムが速くなり、全力で料理する暇も精力もありません。しかし、大晦日に家族団らんという慣習は捨てがたい。どうするかといいますと、結局ホテル、レストランを予約して、辛うじて家族団欒の慣習を守ることができたのです。便利な生活を求めた背景に経済的に豊かになったのも事実です。その時期のレストランとホテルの予約は込んでいて、2カ月前に予約してもなかなかとれないぐらいです。

そういう傾向は、結婚式や新婚旅行にも見られます。新婚旅行はどこへ行くかという質問に対して、40%の人が中国国内と答えました。外国へ行く人ももちろんいますが、パーセンテージはまだ比較的低いです。そのうちオーストラリアは8.6%、香港・タイは6.6%です。これからどんどん日本にも来るのではと思います。

では、配偶者との知り合ったきっかけはといいますと、一つは、日本と少し違うところは、ふ

だんの生活の中で知り合ったと答える人が多いです。つまり、最初は、この人男性だから、女性だからで意識して付き合ったのではなく、会社や仕事の関連で知り合ったのが40%。互いにほとんど結婚を意識せずにふだんの生活の中で知り合ったのが58%。これでもう100%に近いですね。もちろん、知り合うチャンスがないというケースもあります。例えば紡績工場で働いている女性労働者は女性ばかりで、そうなるとやはり男性と知り合うチャンスが必要になってきます。その場合、工場の青年会などで知り合う機会をつくるそうです。

未婚者の理想の出会いというのがあります。結婚相手を探すとき、特に結婚を意識しない、ふだんの生活の中で自然と知り合うのが一番理想的とされます。見合いはあまり好まれません。見合いをしても、日本の見合いのように短時間で結論を出さなければならないことはあまりなく、ただ出会いのチャンスと捉えています。中国では、母の世代から恋愛結婚が多かったので、私たちの世代もほとんど恋愛結婚です。だからといって、見合い結婚はうまくいかないかといいますと、そうでもありません。ただ見合い結婚は理想的な出会いと中国の若者は考えていないのが、確かです。

「結婚時に重視することは」との質問に対して、「彼（彼女）が好きだから」と答えたのは54%に達しています。やはり少なくとも結婚した時点で相手が好きだからと思わないと、いい家庭をつくるのになかなか難しいという結果が出ております。

それから、先ほどはなしのなかにありました20代、30代の学生の就職に関する意識、あるいは給料はどのぐらい欲しいかについて、非常にリアルなデータが出ていますので、ご紹介します。

まず、就職先として最も希望されるのは、貿易関連の会社です。国際貿易など貿易関連の仕事は非常に人気があります。

次は、初任給です。希望する初任給は3万から5万元未満。かなり高いです。さっき5,000元のはなしがあったでしょう。この3万、5万元台というのは、特技者の待遇です。技術を持っている専門職の若者の希望です。お手元のデータによると、彼らは日系企業に対して非常に魅力を感じているのが、9.4%です。

それから、転職の経験があるかないかというふうに聞かれたら、転職したことがあるのが何と84.6%。10人中8人以上あるということになります。

きょうは時間が限られていますので省きましたけれども、日系企業に対して調査データがあります。10ページに人気のある日系企業のデータが出ています。これは世界企業のブランドイメージのランキングです。1番はやはりアップル社です。ソニーは13番。それから、資生堂も入っています。これは中国の若者が感じたランキングです。言い換えれば、一番働きたい会社はアップル社です。大体IT会社が多いということも、このリストでご理解頂けたかと思います。

去年の7月、つまり1年前のデータによると、日系の120社の中に1番がソニーです。2番が資生堂です。それからキャノン、ニコン、カメラ関係ですね。シャープとか、シャープもかなり早い時点で中国に進出した大手です。花王とか。化粧品会社と電気メーカー、それからIT関係

が多いです。日本の化粧品、特に資生堂は中国で非常に人気があります。

7. 中国都市部のライフスタイルと家政婦ビジネス

皆さん、お家でお手伝いさんを雇っている方がいらっしゃいますか。ここにはいらっしゃらないようですね。日本で家政婦を利用する習慣は一般的でないということが立証されたようです。しかし、中国では昔から、都市部に限っていいますけれども、昔から家政婦の習慣があります。別にぜいたくでも何でもありません。また私の実家を例にして恐縮ですが、父は大学教員で、母は写真関係の仕事をしていました。日本でいう中流社会という家庭で生まれた私は、小さいときから家に家族同様の住み込みの家政婦さんがいました。うちの母と同じ地方の出身で、母より八つ年上で手料理の味が母とそっくりです。彼女は孤児だったそうです。うちでは「おばちゃん」と呼んでいました。母は外で忙しくしていましたので、幼い私にとって母よりもこのおばちゃんに懐いていました。彼女に育てられたといっても過言ではありません。この文化は特に沿岸部の都会に根付いて家政婦を利用することに全く違和感がありません。香港、華僑の多いシンガポールもそうでしょう。それは一つのライフスタイルだと考えられます。

日本では他人が家に入ることにかなり抵抗感があります。最近ヘルパーが入ることに対しても同様な抵抗感がまだあると聞いています。中国の家庭には、他人が入ってくることにあまり違和感がなくて、近所の子供が遊びに来て食事の時間になると、一緒に食卓を囲むことは珍しくありません。一昔の日本にも同じような風景があったと伺ったことがあります。

同じ中国でも、今の家政婦事情と私の小さいときのとはかなり違っています。我が家の場合は住み込みでした。つまり女主人が自分の故郷から信頼できる、ときには悲しい境遇にいる人を助けるためでもあります、手伝いさんとして来てもらいます。来た当初は独身の若い女性でした。わが家で何年か働いたのち、たとえ女主人より年上でも、女主人は自分んちの娘を嫁がせるように結婚の世話をします。彼女が結婚してうちを出た後も、彼女の家が我が家のように思えました。遠い親戚よりも親しい関係が彼女の死ぬまでずっと続いていました。私は上海に帰ったら必ず彼女の家を訪ねます。先月上海でおだやかに寿命を全うしました。95歳と長生きでした。彼女の死は私にとってものすごく悲しいことです。そのぐらい、家族の一員として、一生付き合える大切な存在です。これが一昔まえのお手伝いさんの事例です。

ところが、今はちょっと違います。近年の家政婦は、かなりビジネスライクになりました。プリントに書いてありますように、3ランクに分けられています。つまり一つは普通のパートタイムの家政婦。もう一つはちょっと学歴を持つ、勉強も教える家庭教師兼務の家政婦。このタイプは教育ママたちがよく使います。富裕層まではいかなくても、ちょっといい仕事を持っているママたちも利用します。この二タイプの家政婦は住み込みではありません。それから三つ目のランクは、高級家政サービス員と称して、サービス員ですから、必ず女性という必要はありません。そうなってくると、月給が普通のサラリーマン以上、つまり8,000元以上のランクです。普通の

仕事よりも高給取りです。そのかわりに、住み込みのケースがあります。例えばお父さんが社長であちこち飛びまわっています。ふだん家に奥さんしかいない裕福な家庭で、この住み込みの高級家政サービス員は子どもの世話を見ます。家計の苦手な奥様がいったら、このサービス員は、番頭さんのような役割も担います。つまり大きな家を管理してもらうケースまで出てきています。家政婦のビジネスもここまできたかという感じですね。

でも、普通の家庭は普通のパートタイム家政婦を利用します。例えば友人の息子さんたちは、まさに今話したバーリンホウです。その息子さん夫婦は、それぞれ違うIT会社に勤めています。つまりホワイトカラーに属する若者です。夫婦に幼い娘さんがいます。彼らは休みの日に、掃除、洗濯など、週に1回二、三時間のパートタイムの家政婦を使っています。その時間に彼らは子どもを実家の母に預けて夫婦二人で映画を見に行ったり、買い物を楽しんだりします。ここに座っていらっしゃるお父さま、お母さまから見ると、理解しにくいかもしれませんが、中国の都市部ではこれが普通です。人の手を借りないと、平日のストレスが解消されず、次週の仕事に、子育てに、自分の心身の健康にマイナスをもたらすと彼らは考えるからです。社内旅行もチビちゃんを連れて行くのが普通です。彼らの楽しみ方、仕事のやり方は上の世代と全然違うようになっています。

若い夫婦のそういうライフスタイルも、また中国の「いま」です。生意気だと、文化や習慣の違う皆様が内心に思っていらっしゃるかもしれませんが、この現象が一つ新しいビジネスにもなっています。昔のお手伝いさんは信頼関係を前提に成り立つものですが、いまはビジネスなので、いい家政婦を見つけるのは簡単なことではありません。そして、年々人件費の高騰につれ、家政婦の給料も上げてやらなければ不満でやめられてしまうこともあります。リアルな現実問題です。旧暦お正月の春節前後、1週間から10日間ぐらい家政婦たちは年に一度の帰省をします。この10日間、女主人は大変です。都会の人びとは家政婦のいる生活に馴れてしまっていますので、いつの間にか家政婦は都会人にとって、欠かせない存在になっています。

日本に「家政婦のミタ」というドラマがありますね。中国でも家政婦を描く連続ドラマが人気です。昨年、私が上海に帰った間このドラマがやっています。はまってしまいましたね。見終わったときに思いました。なるほど、このドラマに描かれているのは、まさにいまの中国の社会問題です。家政婦は都会人のライフスタイルに重要な役割を演じているだけでなく、雇用者と被雇用者のあいだにおもしろいバランスの変化が見られているのです。

最後に子育てについてすこしお話します。やはり20代、30代には子どもがまだ小さいので、子育てするときに、どこで情報を手に入れ、子どものために何をやっているか。お手元のプリントにそれをまとめた情報があります。ゆっくりお話しする時間がなくなってしまいましたが、簡単に言いますと、それは北京、上海、広州の3つ都市における20代から30代の母親たちの子育てに関する意識調査の結果です。「子育てにかかわった家族はだれか」という問いに対して、「自分の母親」が32.7%になっています。子育てをする若い夫婦にとって、ちょっと見てもらいたいと

頼めるのは、やはり自分の母親です。

それから、子どもが１歳までの食事の手づくり頻度は、65.3％となっています。これはいいことだなと思いました。小さい子どもにとって母親が作った手料理の味が「ふるさとの味」になりますので、とても大事なことです。そして、子どもの食べ物に対する安全性を重視するのが、83.4％となっています。いろんな食品の問題が中国にありましたので、小さい子どもを育てている若い母親たちは、そこにかなり神経をとがらせています。選ぶときに、高くてもいいからとにかく安全ということをまず意識します。それから、そういう情報はどこから入手するかというと、ネットです。いろんなもの、おむつまでネットで買っていますからね。ネットで買うと、すごく安いですし、注文したら、すぐ届けてくれますので。宅急便と言ったら、日本のクロネコ宅急便サービスは、今、上海に進出していますよ。料金はちょっと高いですが、荷物を玄関先まで丁寧に扱って時間通りに届けてくれるので、中国の富裕層にたいへん歓迎されています。日本人にしかできないようなサービスはたくさんあると思います。これからこのような質の高いサービスを輸出することがこれからの課題ではないかと、アジア貿易や国際貿易の視点から見てもそう思います。

もう時間になりました。残りの20分はいまの中国の若者をよく記録した、考えさせられる映像をご覧になって頂きます。いま、中国で非常に人気のある若い作家が出てきます。彼もまた80後です。彼らの苦悩と希望を、どうぞご覧になっていただきましょう。

○彭　時間をすこし超過しましたが、これで終わります。（拍手）

○中川　彭先生、どうもありがとうございました。

本当に、ある国を知るには、まずその国の暮らしを知ることだということでありますが、本当にそのとおりだと思うんです。家政婦一つとってみても、我が日本の市原悦子の「家政婦は見た」とは随分様子が違いますし、若者ということでも、私たちの世代ですと、中国の若者というと紅衛兵なんですね、どうしても。それが今の裸婚時代というんですか、子ども、若者たちの姿、何となく今の日本の草食系、肉食系という感じがしますね。紅衛兵と裸婚時代との間にギャップがあるのか、それとも何かつながっているものがあるのか、興味深い津々たるものがあると思うんです。

皆様もいろんな質問、疑問がおありになるのではないかと思います。時間が大分押しておりますが、ぜひご質問なさってくださいませ。いかがでございましょうか。

○会場　時間が過ぎて申しわけございませんが、一つ気になっていることがございまして、これは今、先ほど蟻族の悲劇とか、今のビデオの内容からいって、あれは中国の国内の仕事がないというふうな話なんですけれども、これとはちょっと見方を変えまして、私、気になっていることは、今、海外に進出している学生さんの、あるいは若者たちの度合い、これが韓国とか中国とかの方は非常に多いと聞いているんです。それに比べて、今、日本は何か島国根性で閉じこもっていて、余り出たがらないというふうな傾向があるというふうに、私は認識しているんですけれど

も、先生は中国と日本を比較できるお立場から見まして、今のこういう日本の若者が本当に海外へ出たくないのか、あるいはその度合いが少ないのか。あるいは、この間この問題も議論したことがあるんですけれども、今、インターネットがはやっているので、わざわざ出ていかなくてもいいんだというふうな意見を持つ方もいらっしゃるんです。でも、余りにも数が少ないというふうな傾向が聞かれておりますので、その点について先生の、こういった心配は必要ないのかどうかとか、そういったことをちょっとお話しいただければと。

○彭　わかりました。実は今日の午前に留学生の面接をしてきました。うちの大学にも北京大学と蘇州大学と、オーストラリアやニュージランドの大学に毎年学生を送り出しています。おっしゃった日本の若者があまり外に出たがらないという傾向が最近よく言われていますけれども、全体的に見ますと、確かにそういう傾向はないとも言えません。実際に去年私のところにも、中国から奨学金を出して募集しているというのに、希望者はいませんでした。しかし、今年は枠の倍の学生が申し込んできています。ですので、一概に言いにくいところもあります。今の中国の若者は外へ出たい人が多いということは、一つは外国といっても民主主義国家に出てみたいというのが確かにあります。アメリカにいる留学生は、韓国の学生がトップだったんですが、最近は中国の学生がトップになったと聞いております。中国国内では、先ほども作家韓寒さんの話がありましたように、特にバーリンホウ・ジョウリンホウの若い世代は民主主義にあこがれています。中国の若者は民主主義にあこがれを抱いていますので、出て見てみたいという気持ちがつよいです。もう一つは、外の世界を見て自分で起業したいという積極的な開拓タイプの若者がふえています。その背景に中国の高度成長期が彼らに自信をつけたということがあるのではないかと考えます。

一方、日本の若い人はなぜ最近、例えばデートでも家でビデオを見ているような、外へ出ていかないのかと言われていますが、一つは家で見たほうが安いと、彼らはいうのです。もう一つは、日本は非常に居心地がいい。これも事実です。食べ物はおいしいし、お母さんは優しいし、どこにもファミマーがあって便利だしという感じですね。なかなか出ようとしません。親もあまりかわいい子を旅させようとしません。外を見なさいとも言いません。若い人たちが現状に満足している面と、出ることへの不安が、10年前と比べたら、その不安の気持ちがふえています。たとえば外国に出たら好かれないとどうするとか、なんでわざわざ外国にいくのとか、草食系がふえたからかもしれません。そして、日本の経済が停滞ぎみということも、学生たちの自信不足の遠因になっているようです。ふだん行動力がちょっと欠けている学生をいつも励ましています。もちろんやる気満々の学生も多くいます。彼らをおおいに期待したいんですね。やはり若いうちに外へ出て、世界を見てほしいものです。

○会場　ありがとうございます。

私はもうすぐ、死のほうが近いので、余り心配することはないんですけれども、結局そんなことで日本の活力、こういったものが失われていかないかなと思って、それを心配しているだけの

話なんですよね。

〇彭　先ほどお話しました加藤さんのような青年もいます。世界でパワーフルに活躍している日本の若者もたくさんいますので、それほどご心配なさらなくていいと思いますよ。

〇会場　ありがとうございました。

〇中川　どうもありがとうございました。

パリのルーブル美術館の日本語の案内板が外されて、中国語に置きかわったというのが七、八年前に随分話題になりましたが、日本人より中国人というトレンドは、若者だけでなくて日本人全体にあることなのかもしれません。そんな感じを私は持っておりますが、ほかにご質問いかがでしょうか。

〇会場　どうもありがとうございました。えらい時間が遅くなって申しわけございません。

きょうのテーマとは直接、ちょっと外れるかもわかりませんけれども、中国が非常に経済大国になった。まさに新興国パワーと世界秩序、新興国というパワーを持ってきたと。そうしますと、今の中国の動き等々、私なりに見てみますと、経済力とか軍事力をバックにして、非常に強引な制度を進めているんじゃないかと。例えば直近では東シナ海とか南シナ海、領土の件で、それも話し合いということではなくて、ベトナムの調査船に対して妨害をするとか、そういった意味で経済力、軍事力をバックにして、あるいは人民元等の引き上げとか、そういうのはなかなか、世界秩序はやっぱりそれだけ影響力を持ってくれば、世界の各国と協調して話し合うところは話し合って、世界秩序を保っていただきたいと思うんですけれども、何かその辺が、パワーを持ったら持ったでそれをバックに、今のところ世界秩序をどうももう一つ乱しているような方向に進んでいるのではないだろうかというような感じもするんですけれども、先生はそのあたりどのようにお考えでしょうか。

〇彭　私が中国政府を代表して答えるわけにはいきませんので。（笑）　むずかしいご質問ですが、今おっしゃったことは、日本のマスコミも問題にしていることです。私の立場で答えるような問題ではないと自覚しています。ただ一つ共感できるのは、やはり経済的に力を持った以上は責任も持つべきということです。そうでないと、間違いなく世界から批判されます。東南アジアの海域でのトラブルや、国内の列車事故など、問題が山積みです。それらの問題は、事故や衝突という形で現れていますが、根底にはやはり弱点が存在していることです。整備点検の問題、あるいは外交やコミュニケーションの問題。特に世界の秩序に対して中国はまだ新入りです。これからいろいろ学習しながら成熟していく段階にあると思います。

30年前までは中国はドアを閉じていました。例え30年が経ったいまでも、国際的なルールを完全に使いこなして仲間入りしているかというと、私はまだ「発展途上国」だと思います。これからもいろんなところで摩擦を起こしながら、批判されながら自分の立ち位置を確立していくでしょう。そういう意味では、日本は大先輩です。

いまのトラブルの焦点は資源です。これからやはり環境を重視し省エネが世界の大きな課題で

す。そういう意味でも、先進国の日本はいいモデルをつくって提供すれば、地球環境の改善に貢献できると思います。領土問題などは、日中国交正常化になった時点で、双方が棚上げにしましたが、いまのような残念な形で問題が拡大されてしまっては、簡単には解決できません。韓国との問題も同様です。歴史的な要因が根底にあります。ただ、これから私たちのもっているエネルギーをどこに注ぐべきかと考えるとき、私はプラスの面、つまりアジアの平和の為に注ぐべきだと考えます。隣人といかに協力してうまくつき合っていくかが、政治家だけではなく、ひとりひとりの市民の努力も不可欠です。日中双方の努力が必要になります。これからの市民レベルの交流が何より大事だと考えております。

○中川　私が意見を挟むのは何なんですが、中国は世界の人口の５分の１あるわけですね。それが物すごい勢いで大きくなっているときに、周りとあつれきを起こさないほうがおかしいと、僕らは思っているんです。その場合、大きくなっている側とそれによって圧迫を受ける側がお互い少しだけ相手の立場を考え合うという態度が必要なんじゃないかなというのが私の意見でございます。ほかにいかがでございましょうか。本当に大分時間がたって申しわけないのですが。

それでは、２時間半にわたる長い講演会、本当に意義のあるものだったと思います。時間があれば、もっともっと質問いただきたかったんですが、今回の前期講座をこれで終わりたいと思います。年が明けますと、３月に今年度後期の国際理解講座がございまして、今まだ構想の段階なんですが、ちょうど来年の３月というのは、ことしの震災、原発事故、世界を揺るがした３・11から１年がたった、その時点で日本がどうなっているのかということ、今この時点でもまだ想像がつかない部分がたくさんあります。ですから、そのときにどんな話ができるのかということをまだ構想している段階なんですが、恐らくそういった内容の後期講座を組ませていただきたいと思っております。ぜひそのときも今回と同じように、多数のご参集をお待ちしております。どうもきょうは本当にありがとうございました。（拍手）

○司会　彭先生、ありがとうございました。

では、きょうは２時間半に及ぶ講座だったんですけれども、３回通しましてたくさんの方に来ていただきましてありがとうございました。また後期もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

本稿は、2011年度帝塚山学院大学国際理解研究所・㈶大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座（前期）における講演をまとめたものである。